

ラグビー選手のルールに対する倫理観

～ 反則についてのアンケートから ～

星 野 繁 一

はじめに

最近、アンフェアな行為が試合中にある。今年の6～7月に行われたサッカー W 杯では、相手選手に噛みつく行為や背後から膝蹴りをする選手もいた。また、プレー中に痛めうずくまっている選手に近づき頭突きを喰らわす等、スポーツマンらしくない行為がよく見られた。またスポーツマンによる不祥事も目立つ。ラグビー選手による大麻吸引や強姦容疑も新聞に掲載された。ラグビー選手だけでなくスポーツマンの倫理観が低下しているようだ。それはマスコミによって「勝利」が大きくクローズアップされ、また進学や金銭と結びつき易いからであろう。スポーツ界が、上はオリンピックから下は小学生の大会まで、勝利至上主義、商業主義に毒されているからであろう。こんな現状から若いラグビー選手たちを守り、立派な社会人に育てるためには、何かをすべきであろうか。まずは、彼らの現状・実態を知ることから始めよう。

1. 目 的

昨今、ラグビーの試合中にガッツポーズをとる選手やレフリーに抗議するプレーヤー、また大観衆の前で取っ組みあいのケンカをする者など、ラグビー選手としてあるまじき行為が数多く見受けられる。

ラグビー選手の倫理観について現状を把握するため、アンケートを実施し彼らの倫理観を分析・考察してみた。

2. 調査方法

先行研究としては、木幡日出男（現東京成徳大学教授）が、1989年サッカー選手に対して行ったアンケート「ファウルについての考え方～中学生サッカー選手の調査から～」(サッカー医・科学研究会)がある。これをベースにして

「反則について」と題するアンケート票（表－１）を作成した。アンケートは、2011年９～11月にかけて各ラグビー団体に配布・回収した。アンケート対象者は、ラグビーの関西学生リーグに所属する６つの大学（京都＝３大学、大阪＝２大学、兵庫＝１大学）の計319名、大阪府及び兵庫県の高校生及び中学生131名、ラグビースクール及び高校の指導者70名、総数520名からアンケート票を回収し、集計結果を算出した。なお、参考までに高校生サッカー部員（兵庫県100名）にもアンケートを実施し、回答を集計した。

３．アンケート結果（表－２）

１）中学・高校生の結果

１．の「相手チームの選手から腹の立つようなことをされた経験がありますか」（以下、設問①、設問②等と略記）の質問に対し、約８割・79.4%の中高校生が「Ａあり」と答えている。同じ高校生サッカー選手の96.0%に比べるとラグビーの数値は低い。設問②「レフリーの判定に不服だったことがあるか」については、「Ｃあまりない」「Ｄほとんどない」を合わせ約３割30.5%の選手が、不服とは思っていない。この設問②では、サッカー選手（25.0%）とは大差はない。設問③「レフリーの判定に素直に従うか」については90.1%「Ａ従っている」と答え、サッカー（80.0%）とは少し差が見られる。設問④「注意、警告、退場の経験」については、

「Ｂある」と答えた選手が、３割程度・31.3%いるが、サッカー（５割以上・53.0%）とは大きな差がある。設問⑤「試合中のケンカの経験」では、「Ｂある」と答えた選手が、15.3%でサッカー（30.0%）とは大きな差がある。設問⑥「反則も戦術だから、してもよい」について、「Ａ賛成」を示す選手が6.9%に対して「Ｃ反対」との答えが60.3%でサッカーの「Ａ28.0%」、「Ｃ36.0%」と比べると差は大きい。設問⑦「場合によっては反則してもよい」については、多少数値は異なるが設問⑥とほぼ同じ傾向を示している。設問⑧「レフリーの判定には従うべき」については、８割・79.4%が「Ａ賛成」で、サッカーの80%と同数値である。設問⑨「勝つためには反則も必要」については、「Ａ賛成7.6%」でサッカー（40.0%）との差は大きい。また「Ｃ反対76.2%」で、サッカー（30.0%）とは、大きな差がある。設問⑩「負けた時、相手をほめる」については、５割以上・53.4%が「Ａ賛成」と答えているが、「Ｂ分らない」と「Ｃ反対」を合計すると46.6%となり同程度の数値を示している。設問⑪「反則はレフリーに見つからないようにする」については、「Ｃ反対61.8

％」で、サッカー（28.0％）とは大きな差がある。設問⑫「報復行為は禁止」については、「A 賛成64.1％」「C 反対10.7％」で、サッカー（54.0％、11.0％）とは同じ傾向を示している。設問⑬「赤・黄カードでない限り反則も可」については、「C 反対」が8割以上・84.0％を占め、サッカー（46.0％）とは大差が見られる。設問⑭「試合時、スポーツマンシップを心がける」については、「A 賛成83.2％」で、サッカーと差はない。設問⑮「スポーツマンなら反則をしないのは、当然」については、「A 賛成」が約5割・51.9％を占め、「C 反対19.1％」である。サッカー（36.0％、17.0％）と同傾向を示している。設問⑯「ルールブックにあるから反則してはいけない」については、「A 賛成」と「B 分からない」が、ほぼ同じ（39.7％、41.2％）であり、サッカーも同傾向を示している。設問⑰「一番大切な事は勝利ではない」については、「B 分からない」が約5割・48.9％を占め、「A 賛成26.7％」と比べ差が目立つ。一方、サッカーの「C 反対」が57.0％を示すのに対し、ラグビーは24.4％と大差が見られる。設問⑱「絶対、反則はいけない」については、「B 分からない」が最多の42.7％を占め、サッカー（43.0％）とほぼ同じ値・％を示す。だが、「A 賛成」や「C 反対」ではサッカーとは大きな差を示している（ラグビー：A34.4％、C24.4％→サッカー：A16.0％、C41.0％）。設問⑲「反則しないで負けるよりも反則してでも勝つ方がよい」については、「C 反対61.1％」「A 賛成13.7％」である。サッカー（「C29.0％」,「A31.0％」）と比べると明らかに差がある。

2) 大学生の結果

設問①では、ラグビー中高生の8割に対し、大学生では9割以上・91.5％もが、「腹の立つようなことをされた経験がある」と答えている。設問②では、レフリーの判定に対して、中高生選手と変わることなく6割の選手が、時々不服があると答えている。設問③では、8割の大学生が、レフリーに素直に従っていると回答している。設問④では、4割以上・41.7％の選手が、レフリーから「注意、警告、退場」を経験している。設問⑤では、4割の選手が試合中にケンカをした経験があると回答している。設問⑥では、中高生の6割もが「反則は戦術であってもよくない」と答えているが、大学生では逆に3割近く・27.0％の選手が「戦術だから反則してもよい」と答えている。設問⑦では、⑥と同様5割近く・45.5％の選手が、「場合によっては反則してもよい」と答えている。設問⑧では、7割以上・73.7％が常にレフリーの判定に従うと答えて

いる。設問⑨では、「勝つためには反則も必要」とする選手が4割近く・37.6%を占めた。この意見に反対する選手は3割未満・27.9%で10ポイントもの差がある。設問⑩「負けた時、相手をほめる」には、賛成者が4割程度・42.3%でしかない。設問⑪「反則はレフリーに見えないようにやるべきである」には、「A 賛成44.2%」で、中高生と比べると3倍近く高い数値を示している。設問⑫「報復行為を禁止」には、「A 賛成56.1%」で「分からない」も3割以上・31.3%であった。設問⑬では「赤・黄カードでない限り反則も可」とする選手は、少なく・8.2%で、「B 反対63.9%」であった。設問⑭では、「スポーツマンシップを心がける」という選手が多数を占め75.9%。設問⑮では、「B 分からない」が最多の42.3%を占め、スポーツマンシップを理解しかねているようである。設問⑯では⑮以上に「B 分からない」が多く・46.1%「反則そのもの」について理解不足のようである。設問⑰では、「C 反対」が最多49.5%を占め、「勝利」を最終目的であると考えているようである。設問⑱では、「B 分からない」が最多で5割近く・47.3%を占め、「反則」についての認識も不十分なように見受けられる。設問⑲では、この設問でも「B 分からない」が最多・42.0%を占める。加えて「反則してでも勝つ方がよい」と答えた選手が4割近く・36.7%に上った。

3) 指導者の結果

ラグビースクールや高校の多くの指導者は、現在プレーをしていないと思われる。従って、設問①～⑤については、かつて自分がプレーをしていた時代を思い出して答えたものと考えられる。設問①、70.0%もの多くが「相手選手から腹の立つようなことをされた経験」があると答えている。設問②、「レフリーの判定に不服」だった経験」は、約5割・51.4%が「B 時々」で「C あまりない」が37.1%であった。設問③、ほぼ100%・98.6%がレフリーに素直に従っていたと答えている。設問④、「注意、警告、退場の経験」は、「B ある21.4%」に対し「A ない」が約4倍・78.6%であった。設問⑤、「ケンカの経験」は「B ない」と答えた指導者が、「A ある」の2倍以上・68.6%であった。設問⑥「反則も戦術だから可」に「A 賛成」は皆無0%であった。設問⑦、「C 反対」が80.0%であったが、中には「場合によっては反則してもよい」とする指導者が5.7%いた。設問⑧「A 賛成94.3%」で「常にレフリーの判定に従う」と答えている。設問⑨、「勝つためには反則も必要」と答えた指導者が、数名・2.8%いた。設問⑩、「敗戦時、相手をほめる」とした指導者は、50.0%で

「B わからない」とする指導者が約4割・38.6%であった。設問⑪「反則はレフリーに見つからないようにすべき」と考えている指導者は極少数で、大半・82.9%が「C 反対」と回答している。設問⑫、「報復行為」については、8割以上・82.9%が、禁止「A 賛成」と答えている。設問⑬「赤・黄カードでない限り反則してもよい」には、9割以上・92.9%が「C 反対」と答えている。設問⑭、「スポーツマンシップを心がける」とした指導者は81.4%であった。設問⑮、「スポーツマンなら反則しないのが当然」には7割が「A 賛成」と回答しているが、「B 分からない」が24.3%を占めた。設問⑯、「ルールブック云々」については、意見が分かれた。即ち「A37.1%」,「B32.9%」,「C 30.0%」であった。設問⑰、「勝利を最終目的にしない」とする指導者は、5割超え・52.9%であるが、「B 分からない」31.4%、「C 反対」15.7%であった。設問⑱では、⑰と似かよった数値が出た。即ち、「反則は絶対いけない」に「A50.0%」,「B 分からない32.9%」,「C 反対17.1%」であった。設問⑲「反則しないで負けるよりも、反則してでも勝つ方がよい」には、「C 反対」が8割を超え・81.4%であった。

4) サッカー高校生の結果

サッカーの高校生については参考程度としたので、ここでは特に記述しない。

4. 分析・考察

19の設問を分析して同類の質問をまとめ、以下のように6つのグループ、1) 相手選手とのイザコザ, 2) プレーヤーとレフリー, 3) スポーツマンシップ, 4) 遵法精神, 5) 反則と勝敗, 6) ラグビーの目的, に分けて考察した。

1) 相手選手とのイザコザ

設問①「相手選手から腹の立つようなことをされたか」については、「A ある」と答えた者は、指導者で70.0%, 中高生79.4%, 大学生91.5%, この順に高い数値を示している。設問⑤「相手選手とケンカの経験」については「B ある」が、中高生, 指導者, 大学生の順に高い数値(15.3%, 31.4%, 40.8%)を示した。

2) レフリーとプレーヤー

設問②「レフリーの判定に不服だった経験」が「Aよくある」と答えた者が指導者7.1%, 中学生9.2%, 大学生32.6%の順に高い数値を示している。ところで、大学生の不服度は中学生の3.5倍, 指導者の4.5倍以上の数値を示し突出して高いが, 問題であろう。設問③「レフリーの判定に素直に従っているか」については、「B時と場合よる」と答える大学生が, 2割近く・18.5%も存在することも問題であろう。

設問④「注意, 警告, 退場の経験」について「Bあり」は, 指導者, 中学生, 大学生の順 (21.4%, 31.3%, 41.7%) に高い数値を示した。設問⑧「レフリーの判定には常に従うべきである」に対し, 「A賛成」する者は大学生73.7%, 中学生79.4%の順に高くなり指導者では94.3%の数値が示された。具体的な数字は分からないが, 指導者の多くはレフリーの現役もしくは過去にレフリーを経験した者が多い。従って, 中学生や大学生とは立場が逆になるので, この数値には重きを置けない。スポーツにおけるルールの判定者を日本では, 一般に「審判」と呼ぶ。しかし, 欧米では「レフリー」「アンパイア」「ジャッジマン」等, 明確に分かれている。我々のラグビーでは, 「レフリー」と「タッチジャッジ」(最近では「アシスタントレフリー」と呼ぶ) とで試合を進めている。

ベースボールでの「アンパイア」とラグビーの「レフリー」とでは, その成り立ち, 役割が大きく異なる。「アンパイア」は例えば, ボールがストライクであったか否かを判定する。しかも野球では, 役割を分担し数名で判定する。従って役割は, 機能的である。だが, 「レフリー」は人間的である。レフリーは両チームから信頼されゲーム判定の依頼を受け, プレーを裁く役割を持っている。言い換えれば, 裁判官に似た役割を担っている。また時には, オーケストラの指揮者にも例えられる。具体的に言うと, 個々のプレーヤーの長所, チームの特徴を生かした判定 (例えば, アドバンテージ等) を期待されているとも言える。しかも, $(15人 \times 両チーム) = 30人$ のプレーを唯一人で判定しゲームを進行させる。

過去, ラグビーの早慶戦・早明戦などでは, 特定のレフリーが長く続いていた時代があった。それは, そのレフリーに対して両チームの信頼が厚く, また自分たちのチームの特徴を把握してくれていて, 各チームの戦術にも合わせて笛を吹いてくれたからであろう。だが, 現在では若手レフリーの育成もあって協会・レフリーソサエティーが, 各試合のレフリーを割り当てるようになって

いる。

ラグビーでは、もともとレフリーはいなかった。万一の時は両チームのキャプテンが裁いていた。やがて、対校戦が生まれ、時代の流れとともに客観的な判定が、要求されるようになりレフリーが誕生する。その人物は、若いプレーヤーにとって自分よりはるかに経験や見識が豊富なOB、つまりジェントルマンであった。

ラグビーの原点は、自らが反則を犯すことなくプレーをしようという意志と「レフリー」への信頼によって成り立っているものである。このような背景を持ったラグビーなので、レフリーに対する抗議など絶対にあってはならない。ラグビーの歴史や伝統を、そして脈々と流れるラグビー精神を理解してのプレーが要求される。

3) スポーツマンシップ

夏の甲子園・開会式で、「スポーツマンシップに則って……」と言うような宣誓の言葉がよく聞かれる。設問⑭「試合時、スポーツマンシップを心がけるに75～85%近く（中高生83.2%、指導者81.4%、大学生75.9%〔グラフー1〕）が、「A賛成」を示している。しかし、設問⑮の「スポーツマンなら反則しないのは当然」に「A賛成」を示すのは、中高生で5割強・51.9%で、大学生に至っては37.9%（グラフー2）でしかない。なぜ？このような差が生まれるのだろうか。多分、スポーツマンとは何か？ スポーツマンシップとは何か？を理解していないと思われる。その証拠に大学生の5割近く・46.1%が「B分らない」と答えている。

スポーツマンシップとは、スポーツ場面におけるジェントルマンシップである。よく知られているが、英国の上中流階級教育目的は、ジェントルマンを育てることである。

19世紀の初め頃、多くの近代スポーツが誕生し、ジェントルマンの内容に変化が現れる。つまり普段の生活では、ジェントルマンらしく振る舞うことは容易である。しかし、ルールある闘争と言われるスポーツの場面、やるかやられるかのスポーツの場でも冷静に、卑怯な行為をせず、フェアにジェントルマンらしく振る舞う人物こそ、本当の意味でジェントルマン、スポーツマンであると考えられるようになる。つまり、「フェアなプレーヤーが、すなわちスポーツマン、ジェントルマンである」と言われるようになっていく。こうして、ジェントルマンとスポーツマンは同義語となって行ったのだった。今日、我が

国では、一種の軽蔑を含むニュアンスで「スポーツマン」と言う言葉が使われることもあるが、それとは非常に大きな差がある。

このようにラグビーの歴史や伝統に根ざした指導が、ラグビーの現場でなされているのか大いに疑わしい。報復行為は絶対してはならないし、例えば試合で負けたとしてもスポーツマンらしく、ジェントルマンらしく、相手をほめるべきである。しかし現実には、設問⑫「報復行為の絶対禁止」に対して 大学生の回答は、「A 賛成56.1%」でしかない。また、設問⑩「敗戦時、相手をほめるべき」への「A 賛成」は4割強・42.3%でしかない。“Good loser”は死語になってしまったのだろうか。

4) 遵法精神

設問⑪「反則はレフリーに見つからないようにやるべき」に「A 賛成」する者は中高生で17.6%だが、大学生では実に44.2%（グラフー3）の者が賛成する。これは驚くべき数字で、確信犯である。また、設問⑦「場合によっては反則をしてもよい」に「A 賛成」する者が中高生では13.7%だが、大学生では半数近い・45.5%の者が賛成している。ところが、設問⑥「反則も戦術の一つだから、してもよい」には大学生の27.0%（グラフー4）しか「A 賛成」しない。ましてや、「退場や黄カードにならない限り、反則をしてもよい」（設問⑬）には63.9%（グラフー5）が「B 反対」している。これらの数値については、どのように分析・考察すべきだろうか。

それは、チームとしてではなく個々のプレーヤーが、隠れてコッソリと場面・場合を判断して反則行為を行っているのだろう。だが、サッカーと比べ特に密集戦では見えにくいラグビーこそ遵法精神やフェアプレー精神が必要である。そうでなければ、試合そのものが成り立たない。これらを大学生は理解しているのだろうか、気がかりである。

5) 反則と勝敗

「勝つためには反則も必要である」（設問⑨）に対し、「A 賛成」と答えた中高生はわずか7.6%だが、大学生では何と4割近く・37.6%が「A 賛成」と回答している。実に中高生の5倍である。この問いへの「C 反対」は27.9%でしかなく、10ポイントも少ない（グラフー6）。さらに、究極の選択として設問⑰「反則しないで負けるよりも、反則してでも勝った方がよい」か？という質問を加えた。これに「A 賛成」する大学生は、何と4割近く・37.6%に上った。

一方、これに「C 反対」する選手は21.3%（グラフー7）で少数派だった。

「近代スポーツが勝敗を争うもの」であることに反対する人はいないだろう。しかし、ルールに則ってフェアに、卑怯な行為をすることなく戦うものでなければ危険であり、死亡事故すらひき起こしかねない。こんな分かりきった論理すら分からずにプレーしている大学生が、4割もいることに驚く。ここまで大学生たちの倫理観が低下しているのである。勝利至上主義に毒されているのだろう。最近、紙上を賑わす中国の食肉偽装現場を彼らは笑えるのだろうか。彼ら大学生の倫理観は、中国のそれと変わらないのではなかろうか。

6) ラグビーの目的

1903年に英国で創立された「ローズ・スカラシップ」⁽¹⁾は、100年以上後の現在でも存続している。設立当初、この「選考の第1資格がラグビー選手であること」⁽²⁾だった。この1例が、ラグビーの教育的価値を明確に物語っている。

世界におけるサッカーの発展は、英国の1890年頃からのプロ化によるものである。一方、ラグビーは、同時代のサッカーのプロ化に逆行するようにアマチュアリズムを大切にすることで発展した。すなわち、パブリックスクールでジェントルマン育成の手段としてクリケット等とともにラグビーが活用されたことによるものである。ラグビー発展の基になっているのは教育である。

設問⑩に「1番大切な事は、試合に勝つことではない」との意見に対し、「A 賛成」する大学生の割合は、わずか17.9%（グラフー8）でしかない。逆に「B 反対」が、約5割・49.5%もあった。大学生のおよそ半数の最大関心事は勝利であるようだ。

教育の分野に身を置く大学生は、学業との両立にあたってラグビーをどのように位置づけるべきであろうか。筆者の回答は、「ラグビーの勝利を1つの手段として学生時代をどのように過ごすかを考え、実行することが目的」である。また同じように、ラグビーを通じて学んだことを土台にして社会人として、どのような形で社会に貢献していくべきかを考え実践しなければならない。

ところが、現状は目標と目的が逆転し、プロと同様「勝ってなんぼの世界」、つまり勝利至上主義に毒されているようである。

大学生にとって厳しい考察や意見を述べてきた。だが実は、大学生たちは「迷える子羊」だった。詳しく分析してみると、設問⑥～⑩の中で大学生たちが「B 分からない」と答えた数値・%が非常に高いのである。「B 分からない」が最高数値・%となった設問が、⑥「反則も戦術の一つだから、してもよい

(B39.8%)」, ⑮「スポーツマンなら反則をしないのが当然 (B42.3%)」, ⑯「ルールブックに書いてあるから, 反則をしてはいけない (B46.1%)」, ⑰「どんなことがあっても, 反則をしてはいけない (B47.3%)」, ⑱「反則をしてでも勝った方がよい (B42.0%)」の5項目あった。また同様に, 1/3もの学生が「B分からない」と答えた設問が6項目(設問⑦, ⑨, ⑩, ⑪, ⑫, ⑬, ⑰)にもわたっていた。倫理観を問うた14項目中, 実に11項目が最多, または1/3もの大学生が, 「B分からない」と答えている。

それは, 迷い悩み葛藤し, 倫理観の低下した大学生の姿を映し出している数値・%といえるだろう。

結果のデーターで見たようにスクール・高校の指導者たちは, 明快な意見を持ちほぼ迷うことなく指導を行っているものと考えられる。ところが, データーがないこともあるが, 大学指導者たちの倫理観に対する意見や意志が, 大学生たちの回答からは伝わって来ないのが実情である。

(*円グラフではPCソフトの関係上, 小数点以下は表現できていない。)

註

- (1) セシル・ローズによって設けられた奨学金制度。フルブライト (奨学金), 米クリントン大統領, M.サンデル (ハーバード大教授) 等の有名人を輩出。帝国主義者だが, 詳細を省く。
- (2) 元日本ラグビー協会副会長・進藤次郎「ラグビー豪傑譚」
『「文藝春秋」に見るスポーツ昭和史 第1巻』文藝春秋社 1988年

5. まとめ

ここでは筆者が, かつて関わっていた大学のラグビー選手たちを中心に要点をまとめてみる。

(1) 「レフリーの判定に対して」, 不服と思う中高生は1割未満しかないが, 大学生のそれは3割以上・32.6%にも上る。

レフリーとアンパイアの違い, 本来レフリーとはどんな役割を持つのか等についての理解が不十分と考えられる。

(2) 現状, 「スポーツマン」という言葉は, それほど高い価値を持っていない。一方「スポーツマンシップ」については, 各種大会の宣誓で大いに活用されるように一般的には価値が認められている。

ところが大学生たちは, スポーツマンシップについての理解が不十分である。

スポーツの場におけるジェントルマンシップと解釈し、それを指導すべきであろう。

(3)「反則はレフリーに見つからないようにやるべきだ」という大学生が、44.2%にも及ぶ。

サッカーでは監督経験者ですら「W杯で勝つには“汚いプレーも必要”⁽³⁾」と公言している。だからと言って、明らかに異なるサッカー文化をラグビー界に持ち込むことは許されない。ラグビーでは、卑怯な行為をしない、フェアプレー精神をあくまで貫くべきである。

(4) 4割近く・37.6%もの大学生が、「勝つためには反則も必要」と答えている。さらには「反則しないで負けるよりも、反則してでも勝つ方がよい」と答える大学ラグーマンが、実に4割近く・37.6%も存在する。

なんと嘆かわしいことだろうか。我々ラグビー経験者は、いったい何を教えて来たのだろうか。勝つための方法のみを教えてきたのではないか。反省をすべきであろう。

(5)「一番大切なことは、試合に勝つことではない」との意見に対し、実に5割・49.5%もの大学生が反対と答えている。

彼らにとっての最大関心事は勝利である。彼らの思考回路の中では、目標と目的の逆転現象が生じているようだ。

(6) 倫理観を問うた質問14問中、「分からない」と回答した数値・%が、最高を示した設問の数が5項目。また、1/3もの学生が「分からない」と回答した項目が6項目あった。

多くの大学生選手が、勝敗と倫理観の間で迷い悩み葛藤している姿が浮かび上がった。大学生選手たちに救いの手を差し伸べる必要がある。

註

(3) 元Jリーグ監督リトバルスキーが2014年6月、朝日新聞スポーツ面で語っている。

おわりに

学生諸君には、ラグビーのノーサイド精神を思い出してほしい。その具体例は、試合後のアフターマッチファンクションである。グラウンドでは固そうに見えるレフリーだが、歓談をすれば自然とレフリーの人物像もつかめるし、ラグビー精神を少しは理解できるだろう。また、相手チームの選手たちとの歓談

は、切磋琢磨する材料を提供してくれ、また人脈も広がっていく。社会では自分の努力はもちろんだが、人脈が活躍の場を広げてくれることも事実である。

大学の指導者たちには、「ラグビーの原点は教育」であることを思い出ししてほしい。そして、迷い悩み葛藤する大学生たちに、ラグビーを通して確固たる倫理観を育ててほしい。そうでなければ、我々が愛するラグビー界にさらなる勝利至上主義、拝金主義、商業主義が、そして筋肉増強剤・薬物使用が広がり、不祥事が続発することは火を見るより明らかである。

今回のレポートは、2013年3月 ラグビー学会での報告を基にまとめたものである。

この報告については、アンケートの配布・回収、集計等に高木應光氏（芦屋高校・非常勤講師）にご協力を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

- ・大西鉄之助『闘争の倫理～スポーツの本源を問う～』二玄社 1987年
- ・E, ダニング K, シャド著／大西鉄之助, 大沼賢治訳『ラグビーとイギリス人』ベースボールマガジン社 1983年
- ・中村敏雄『スポーツ・ルール学への序章』大修館書店 1995年
- ・阿部生雄『近代スポーツマンシップの誕生と成長』筑波大学出版会 2009年

キーワード ラグビー フェアプレー ノーサイド

表 1. アンケート票

「反則について」アンケート (○をつけて下さい)

【所属】・社会人：クラブ，指導者

・大学生：体育会，同好会，指導者

・高校生：学校，同好会，指導者

・中学生：学校，スクール，指導者

・小学生：学校，スクール，指導者

1. 相手チームの選手から「腹が立つ」ようなことをされた経験がありますか。
A. ある B. ない
2. レフリーの判定に不服だったことがありますか。
A. よくある B. 時々ある C. あまりない D. ほとんどない
3. レフリーの判定に素直に従っていますか。
A. 従っている B. 時と場合による C. 従わない
4. レフリーから「注意，警告，退場」などを受けたことがありますか。
A. ない
B. ある → ある人は：その内容は？
1 相手選手への危険・悪質な反則をして
2 レフリーへ不平・不満を言ったり，反抗した
3 相手選手の反則やプレーに対して文句を言ったり，悪口を言った
4 味方がペナルティを犯した時，相手チームのプレーを遅らせるようなことをして
5 その他（自由に記入してください）

-
5. あなたは，試合中に相手選手とケンカをしたことがありますか。
A. ない B. ある
 6. 「反則も戦い方・戦術の一つだから，してもよい」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対
 7. 「場合によっては，反則をしてもよい」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対
 8. 「レフリーの判定には常に従うべきである」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対
 9. 「勝つためには，反則も必要である」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対
 10. 「試合に負けた時は，相手チームをほめるべきである」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対
 11. 「反則は，レフリーに見つからないようにやるべきである」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対
 12. 「相手の反則に対して，絶対，しかえし・報復行為をしてはいけない」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対
 13. 「退場やイエローカードにならない限り，反則してもよい」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対
 14. 「試合をする時，心がけることは，スポーツマンシップである」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対
 15. 「スポーツマンなら，反則をしないのが当たり前・当然である」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対
 16. 「ルールブックに書いてあるから，反則をしてはいけない」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対
 17. 「一番大切なことは，試合に勝つことではない」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対
 18. 「どんなことがあっても，反則をしてはいけない」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対
 19. 「反則しないで負けるよりも，反則してでも勝ったほうがよい」という意見について
A. 賛成 B. 分らない C. 反対 (以上)

*ご協力，ありがとうございました。

なお，このアンケートは学術以外の目的には使いません。

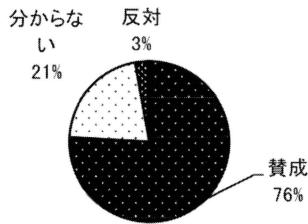
(文責：日本ラグビー学会：星野繁一，高木應久)

表2. アンケート結果

質 問 (各欄の数字は%)		大学生 319人	中高生 131人	指導者 70人	高校サッカー 100人
1. 腹の立つような事をされたか	A ある	91.5	79.4	70	96
	B ない	8.5	20.6	30	4
2. レフリーの判定に不服	A よくある	32.6	9.2	7.1	11
	B 時々	59.2	60.3	51.4	64
	C あまりない	6.6	20.6	37.1	24
	D 殆どない	1.6	9.9	4.4	1
3. レフリーに素直に従っているか	A 従う	79.6	90.1	98.6	80
	B 時と場合	18.5	8.4	1.4	20
	C 従わない	1.9	1.5	0	0
4. 注意、警告、退場の経験	A ない	58.3	68.7	78.6	47
	B ある	41.7	31.3	21.4	53
5. 試合中にケンカの経験が	A ない	59.2	84.7	68.6	70
	B ある	40.8	15.3	31.4	30
6. 反則も戦術だから してもよい	A 賛成	27	6.9	0	28
	B 分らない	39.8	32.8	11.4	36
	C 反対	33.2	60.3	88.6	36
7. 場合によっては反則してもよい	A 賛成	45.5	13.7	5.7	47
	B 分らない	29.5	30.5	14.3	29
	C 反対	25.1	55.7	80	24
8. レフリーの判定に常に従う	A 賛成	73.7	79.4	94.3	80
	B 分らない	18.8	17.6	4.3	15
	C 反対	7.5	3.1	1.4	4
9. 勝つためには反則も必要	A 賛成	37.6	7.6	2.8	40
	B 分らない	34.5	25.2	8.6	30
	C 反対	27.9	67.2	88.6	30
10. 試合に負けた時、相手をほめる	A 賛成	42.3	53.4	50	37
	B 分らない	33.2	39.7	38.6	45
	C 反対	13.2	6.9	11.4	18
11. 反則はレフリーに見つからないように	A 賛成	44.2	17.6	2.8	31
	B 分らない	33.5	20.6	14.3	41
	C 反対	22.3	61.8	82.9	28
12. 反則への報復行為は禁止	A 賛成	56.1	64.1	82.9	54
	B 分らない	31.3	25.2	10	35
	C 反対	12.5	10.7	7.1	11
13. 退場、イエローでない限り	A 賛成	8.2	3	2.8	18
	B 分らない	27.9	13	4.3	36
	C 反対	63.9	84	92.9	46
14. 試合時はスポーツマンシップ	A 賛成	75.9	83.2	81.4	76
	B 分らない	21.3	15.3	17.1	23
	C 反対	2.8	1.5	1.5	1
15. スポーツマンは反則しない	A 賛成	37.9	51.9	70	36
	B 分らない	42.3	29	24.3	47
	C 反対	19.7	19.1	5.7	17
16. ルールブックにあるから反則	A 賛成	32	39.7	37.1	35
	B 分らない	46.1	41.2	32.9	42
	C 反対	21.9	19.1	30	23
17. 一番大切な事は勝利でない	A 賛成	17.9	26.7	52.9	10
	B 分らない	32.6	48.9	31.4	33
	C 反対	49.5	24.4	15.7	57
18. 絶対、反則してはいけない	A 賛成	17.2	34.4	50	16
	B 分らない	47.3	42.7	32.9	43
	C 反対	35.4	22.9	17.1	41
19. 反則しないで負けるより反則してでも 勝つほうがよい	A 賛成	36.7	13.7	1.5	31
	B 分らない	42	25.2	17.1	40
	C 反対	21.3	61.1	81.4	29

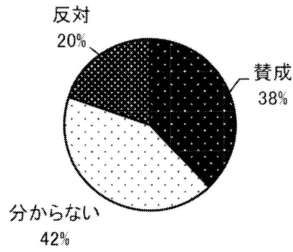
(アンケート集計結果2011/12)

14. 試合時はスポーツマンシップ



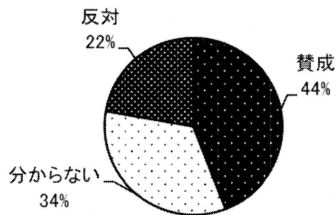
グラフー 1

15. スポーツマンは反則しない



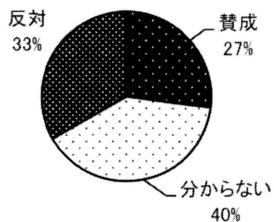
グラフー 2

11. 反則はレフリーに見つからないように



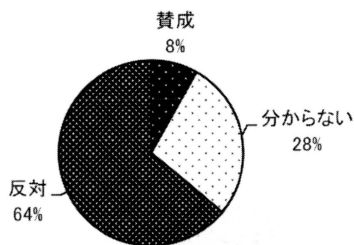
グラフー 3

6. 反則も戦術だから してもよい



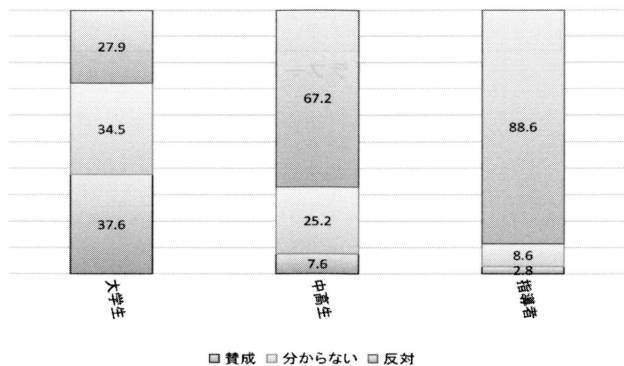
グラフー 4

13. 退場・イエローでない限り

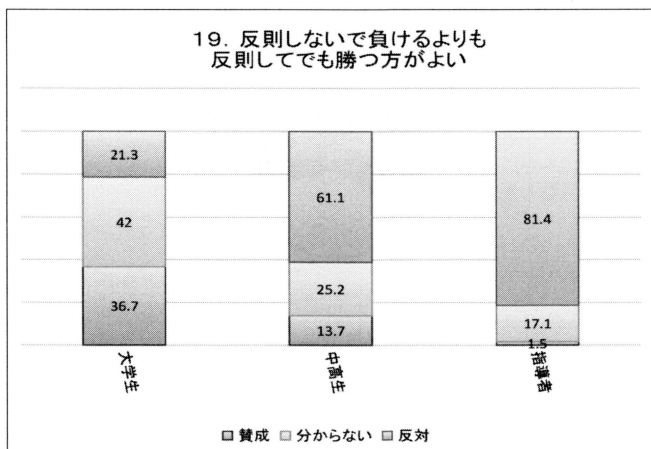


グラフー 5

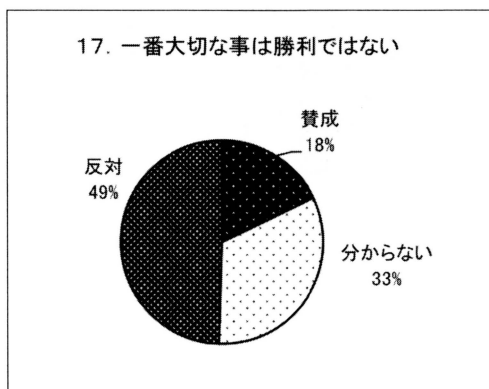
9. 勝つためには反則も必要



グラフー 6



グラフ 7



グラフ 8